

<「知るっば!久留米」 令和2年12月24日(木) 12:30~放送分>

## 有馬火消し ～第3回～ 「久留米城下町での活躍」

<ゲスト：久留米市役所市民文化部文化財保護課 水原 道範主査>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

12月第4週目の今週は、『久留米城下町での活躍』をテーマにお送りします。

ゲストは、この方です。

ゲスト:水原道範さん(以下「水原」)

久留米市役所文化財保護課の水原道範です!

よろしくお願いします。

坂本 毎週面白いお話が続いていますね。

今週のテーマも『有馬火消し』なのですが、江戸から久留米に戻って、『久留米城下町での活躍』についてお話を聞きたいと思います。

水原 先週に続いて、有馬火消し隊行列図をご覧くださいっていますが、殿様など200名が出動している様子を描いています。

これに映っている人たちの道具を見ますと、「鳶口(とびくち)」や「掛矢(かけや)」という大きなハンマーですね。それと「梯子(はしご)」などが中心になっています。

これは第1回でお話ししたと思いますが、火消しの活動は、家を壊して延焼を防ぐことが主になっています。

坂本 解体の道具といった感じですね。

水原 そうですね。燃え広がらないようにするために、そういった道具を持っているというのがわかります。

坂本 消火はもちろんですが、燃え広がらないように近所の建物を先に壊して類焼を防ぐということが重要だったということですね。

水原 この中で注目していただきたいのは、久留米で独自に作られた道具があるんです。

「玄蕃桶(げんばおけ)」という水桶なんですけど、2人で担ぐ大きな水桶です。

これは、有馬の火消しの方たちが考案したものです。

この桶の中にたくさん水を入れて、「龍吐水(りゅうどすい)」という手押しポンプに水を注いだり、そ

の水を火元に直接かけたりしていました。

一人ずつバケツリレーをしても間に合いませんから、こういった道具が活躍したといわれています。

坂本 ほかにもあるんでしょうか？

水原 はい、「雲流水(うんりゅうすい)」という道具があります。

これも手押しポンプなんですけども、これは久留米ゆかりのからくり儀右衛門・田中久重さんが開発したものと言われています。

坂本 へえ～、どこでも田中久重さんの名前が出てきますよね～!?この人は本当にすごい方だ。

ものづくりの創意工夫というのは、久留米人の気骨みたいなものを感じますよね。

色々なものを久留米で考案されたり、あるいは江戸で考案したり鍛えたりして、様々なスキルを久留米に持ち帰って、その後、久留米で活躍していくという話になるわけですね。

水原 久留米でも消防隊が組織されているんですけど、その中に「火の番方(ばんがた)」という役を置いているんですね。

この方たちは、日ごろは城内で精米所や時刻を知らせる鐘突き堂に勤めているのですが、

いざ火事になったときには真っ先に駆けつけて、消火にあたりました。

その他の侍たちは大手門、今の明善高校の近くに大きな鳥居があるんですが、あの辺に集合して火元へ向かっていました。

坂本 今でいう消防団みたいに、みんなで集まって消防車に乗って行くという感じですか？

水原 そうですね。それぞれ持ち場が決められておりますので、藩の施設やお城の中など色々なところに散っていくわけです。

ところが、藩士の方々は、久留米城やその藩の施設だけを守るためだけに活動します。

町家に関しては、町人が自分たちで火消しを組織して活動していたんです。

城下町を8つの地区に分けて、各地区に町別当(まちべっとう)という方がいて、

その方たちを中心に組織された消防隊が消火にあたっていたということですね。

坂本 へえ～、町別当って言うんですね。

水原 その方が町を治める名主さん、つまりリーダーです。

この方たちが、いざという時に水をためたバケツ、梯子、のぼりやちょうちんを担いで現場に駆け付けていたそうです。

坂本 なかなかみなさん用意周到と言いますか、日頃から練習というか訓練をされていて、今に通じるものがやっぱりあるんでしょうね。

水原 今も消防団の方が日々訓練されていますが、それと同じだと思います。  
第1回でも紹介された文政11年の大火事の時は、とても強い台風の中で起こった火事ですので…。

坂本 シーボルト台風ですね。

水原 その台風の際は、久留米でもあちこちで火災が発生したものですから、消防隊の方がどの火災現場に行ってもいいものか混乱して、その間に燃え広がってしまいました。  
その反省をもとに、それぞれの地区ごとに番所(ばんしょ)を置いて、そこに高さ9メートルの火の見の梯子を作ったんですね。  
そこに半鐘をつけまして、鐘の鳴らし方で火元が遠いとか近いとか、どの方角かなどわかるように指示して、すぐ駆け付けられるようにしました。

坂本 有馬火消しの第1回でもお聞きした、まさに久留米の大火事。これは非常に興味深いですね。  
それがもとになって久留米のまちの様々な建物や施設の配置とか、通り(道路)を広くしたとお聞きしました。

水原 そうですね、よく覚えていらっしゃいますね。  
そういうことで、久留米のまちも日々改善しながら、今現在のようになっているんです。  
この中で消防技術に一番優れていたのは、町人の中では瀬下町の方々なんですよ。  
また、侍の中では洗町、今ブリヂストンの工場があるところなんです、そこには久留米藩の水軍の方たちがいらっしゃいました。

坂本 なかなかいいですね。

水原 どちらも船乗りの方が多かった町でした。  
船乗りということで、体力があって、勇気があって、しかもロープワークが得意な方々なので、「掛矢」という道具で屋根や壁を壊したり、綱(つな)をかけて建物を引きずり倒したり、そういったことはお手の物だったみたいですね。

坂本 勇ましいですね。粋(いき)でいなせな方達ですね。

水原 残念ながら、あちこちで喧嘩をしたこともあるようです。

坂本 やっぱ血の気が多いというか、威勢がいいあまりに…ですかね。

水原 そうですね。そして、そのような状況が、明治、大正と続いていたんですけど、  
近代的な消防に変化したのは、大正時代に熊本県出身の宗像小文太(おなかつこぶんた)という方が久留米にいらっしゃってからです。

彼が、10年間熱心に訓練や指導をされて、近代的な消防隊に変わっていったんですね。

坂本 江戸時代から続く伝統は残しつつ、組織や手法は近代的なものに変遷していったんですね。

水原 最初はかなり抵抗があって、苦労したそうですよ。

坂本 組織的に近代化されていくのは、必然だったんですね。

水原さん、興味深いお話をありがとうございました。

有馬火消の流れ、伝統がそういう近代化を経て今につながっていくということで、  
次回は、『受け継ぐ有馬火消の伝統』をテーマにお送りしていきたいと思います。

今日は、本当にありがとうございました。

来週もお楽しみに！